

東京YMCA

2023

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。



山中湖センター100周年

人々に愛され、進化し続けるキャンプ場

100年前に 始まったページ

山中湖センター（以下「山中」）は2023年に100周年を迎えました。100年という歴史の中で、長く山中を大切にし、愛し、支えてくださる方が多くいることを覚え、心から感謝をいたします。

小林弥太郎氏を含む4人が1923年4月に駿河小山駅から明神峠、三國峠を越えて視察に訪れ、その年の夏にキャンプが行われた時から山中のページは始まりました。100年もの間、山中を守り続けてきた方々の働きや思いを書き記すとしたら、何ページくらいになるでしょうか。今年92回目を数え、山中の歴史と共に歩んでいる「東京YMCA家族キャンプ（現在・山中家族キャンプ）」も山中の歴史を象徴するキャンプの一つです。

危機を乗り越え、 今なお「人を育 てる場」として

先人たちの様々な思いでつづられてきたページも、途切れそうになったことがありました。戦後の農地改革により、不在地主とされた山中が土地の所有権を失いかける事態となったためです。それは、山中だけではなく、日本における教育キャンプの歴史が途絶えてしまうかもしれない大きな危機でした。その危機を救ったのが、主事であ

た原直治郎氏とその家族です。キャンプ場を守るため、東京から山中湖に移り住み、何年もの交渉と実績を重ねました。冬はマイナス20度を超える厳冬の地に移住したご家族の計り知れない労苦を忘れてはいけな



1950年の原さん一家。右から直治郎さん、博直さん、直義さん、由子さん

なれば、教育キャンプの歴史も山中も途絶えていたかもしれません。そして、この献身的な働きのおかげで存続した山中は、その後の東京YMCAの会員活動にも大きく貢献し、人を育てる場として今日まで多くのキャンパーの成長に寄与してきました。山中を任せられているスタッフとして忘れずに継承していきたいことの一つです。

未来の子どもた ちのための募金

100周年にあたり、キャンプ場の持続的な発展のための「山中湖センター100周年記念募金」を行っています（下記参照）。皆様のご理解とご支援により、これからも山中が引き続き、

募金の使途

- ①子どもたち100人をキャンプに招待
- ②クライミングウォールやプロジェクタッドベンチャーというプログラム施設の新設
- ③宿泊棟内の各設備のリノベーション

年齢や障がいの有無にかかわらず、未来を担う子どもたち一人ひとりが豊かな体験を通して成長できる機会を作り、新たな体験の場を設けることでチャレンジ、成功体験

山中が ある理由

クラウドファンディングでは、募金をしてくださった方々の山中に対する思い、願いが見てとれます。一つひとつの言葉が私たちへの応援メッセージであり、山中がこ

皆様と共に、 次の100年も

キャンプの持つ力や魅力は、いつの時代でも変わらない普遍的なものがあ

赤△三角

改訂後の幼稚園教育要領には「幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、それらを取り込もうと試行錯誤したり考えたりするために、幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共に良い教育環境を創造する」とある。教育環境の重要性を深く考えるようになった。▼コロナ禍の3年間、他園では多くの行事が中止されたと聞く。しかし、自園では、「コロナ禍でも子どもたちの成長に変わりはなく、そのための教育を滞らせることはできない」との思いから、できる工夫をし、保育を展開した。行事を行う環境が課題となったが、運動会は江東センター経由で借りたグラウンドで全園児が集まって実施でき、年長児の宿泊保育も山中湖センターを占有して実施できた。▼子どもたちが何一つ行事を諦めなかった園生活。各部署が支え合うYMCAの総合力があったからこそ、である。それ故に教育環境に恵まれ、使命の下、保育者が子どもたちにとって大切なことを常に探求するYMCAの保育・教育は、未来を創り主体的に生きる子どもたちの心身の育成に非常に重要な役割を担い続ける。

山中湖センター100周年記念募金

～未来の子どもたちにできること～

東京YMCA山中湖センターの次の100年に向けて、皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

【募金目標額】 2,000万円

【募金方法】

- ①クラウドファンディング
(2023年10月1日～12月30日)
- ②銀行振込、窓口募金
(2023年11月1日～2024年3月31日)

クラウドファンディング

最終目標 1,000万円

温かい応援コメントにも、ぜひご注目ください。

クラウドファンディングのサイトはこちら

（江東YMCA幼稚園 園長 駿河幸子）



障がいのある子どもたちを支援

第37回 インターナショナル・チャリティーラン

4年ぶり駅伝大会 1,500人集う

オンラインウォーキング 約6,131万歩(=約43,000km)

障がいのある子どもたちを支援する「東京YMCAインターナショナル・チャリティーラン」。今年は初めての試みとして、駅伝大会とオンラインのウォーキング大会を同時開催し、合わせて50チームの参加がありました。

この大会は、障がいのある子どもたちの支援と、「障がい」への社会的関心を高めることを目的とする駅伝大会で、1987年に東京で始まりました。現在では全国21カ所のYMCAで開催されています。

9月23日(土祝)、都立木場公園で開催した駅伝大会には、38チーム計

288人が参加。レース前の「こどもラン」に参加した幼児・小学生と保護者約300人、ボランティア・スタッフ約230人と応援者を合わせると、来場者は1,500人を超えました。

一方、コロナ禍で定着したオンラインのウォーキング大会には、約670人が参加しました。

駅伝大会とウォーキング大会による今年の支援金総額は、5,176,000円となりました。心より感謝申し上げます。

大会実行委員長 上田晶平さん

今年のチャリティーランは、4年ぶりに木場公園で開催できました。「こどもラン」では、あいにくの雨の中でも多くの幼児・小学生の元気な声が溢れ、大人の駅伝大会では、雨もあがり、沿道の声援に押されながら頑張るランナーの姿が戻ってきました。会場に集まり対面で声を掛け合いながら、参加することの喜びを改めて実感できた大会となりました。

この大会は、当初より国籍や年齢、障がいの有無によらず多彩なチームと一緒に走ることを特徴としてきました。今年も視覚障がいのある方が伴走者と一緒に走る「バンバンクラブ」や、東京YMCAの知的障がい者グループなど、約40人の障がい者ランナーが快走し、支援をする人も受ける人も一緒に楽しむ大会となりました。



多くの会員の皆様にボランティアとしてお手伝いいただき、また、社会体育・保育専門学校を含む各専門学校の学生さんなども、これまで以上に主体的に関わっていただきました。本当にありがとうございました。

駅伝大会と同時に、スマホアプリを利用したウォーキング大会を、今年も引き続き開催しました。走ることが難しい方や遠く離れた地にいる方でも気軽に参加できることから好評を得ております。リアルな触れ合いを大切にしながら、ITを利用して多様な方々に参加いただける、YMCAならではの大会になったのではないかと思います。

全国スポンサーである三菱商事株式会社様を含む多くの協賛企業様や、ワイズメンズクラブなど多くの団体様にもご支援ご参加いただきました。改めて感謝申し上げます。

来年も是非引き続きご協力ご協賛いただくと共に、一人でも多くの方に再度ご参加いただきますようお願いを申し上げます。



雨の中、開会準備に励むボランティア



元気いっぱいの「こどもラン」



1位の「しのめレッド」

チャリティーラン 参加者の声

<チャリティーランの詳細はホームページで>

- ・入賞チーム一覧
- ・参加・協賛一覧
- ・フォトギャラリーなど



駅伝大会



ウォーキング大会



フォトギャラリー

★運営スタッフ

東京YMCA社会体育・保育専門学校2年
富山さくらさん

私たち東京YMCA社会体育・保育専門学校社会体育専門課程2年生は、運営スタッフとして携わりました。司会進行を担当した富山さん(左)とクリスさん
事前準備の段階から、実行委員会への出席、木場公園での大会告知ポスターの掲示、前日の備品搬入作業など、関わる機会が多くありました。当日の私の役割は司会進行です。大勢の人の前で話すことをあまり経験したことがなく、とても緊張していましたが、同じく司会進行役のクリスさんと本番前に練習をし、より良い開会式にするために相談したおかげで、本番では堂々と話すことができました。私以外にも社体保の学生はコース誘導、救護ブース、準備体操、代走などを担当しましたが、自分の役割が終わっても満足せずに、自分でできることを探して行動に移していたと思います。今回、社体保の学生が中心となってチャリティーランを運営し、社会に貢献できる喜びや重要性を学ぶことができたと感じています。



司会進行を担当した富山さん(左)とクリスさん

★コスチューム賞

「チームどうするどうする」
Cargill Japan LLC 山本友香里さん

9月初旬にチームメンバーが決まり、ランチタイムを利用して全員でコスチュームを制作しました。今年のテーマは大河ドラマと大谷翔平選手。社内には寄付の精神が根付いており、コスチュームの材料費も社員の募金で賄いました。すべての部署で日頃から社会貢献や環境問題などについて話しているため、できることから行動に移していこうとする風潮があります。第1回目から参加しているチャリティーランは、個人としても会社としても貢献でき、社会的意義はもちろん、楽しさもあるので、社内の文化の一部になっています。ウォーキングに参加したチームも、写真を送り合ったりするなど、オンラインでも連帯感を出しながら楽しく参加しました。



★37回大会賞、最高年齢賞

「バンバンクラブ『OUR TEAM』」
バンバンクラブ ガーリックさん、みーやんさん

バンバンクラブ(伴走伴歩クラブ)は、視覚障がいなどの方と聾者・晴眼者がペアになり、世界の大会への出走を目指して毎週土曜に代々木公園や新横浜などでラン練習をしているクラブです。

今回、三菱商事「DREAM AS ONE.」とタイアップして2度目、伴走者を含む3チーム34人が参加しました。網膜色素変性症のぶんたさんは、「走ることで障がいのある子どもたちを勇気づけたい。大会を盛り上げたい」と話します。

ラン好きの皆さん、次回のチャリティーランは当クラブからペア参加しませんか？

入会やクラブについての詳細は、ホームページをご覧ください。



第21回 アジア・太平洋YMCA大会

回復力のある
「コミュニティ」を目指して

9月15日〜20日、南インドのチェンナイにて第21回アジア・太平洋YMCA大会が行われ、21の国と地域から344人（うちユース130人）、日本からは45人が参加しました。前回大会以降、コロナウイルスの世界的なパンデミックをそれぞれ、YMCAが経験し、今回の大会はアジア太平洋

ティ、組織的にも回復力を試される機会が多かったこと、それらを支援と連帯によって切り抜けてきたことが共有され、YMCAの仲間との再会を喜ぶ場面も多く見られました。

新たな理事と役員の選出も行われ、岡戸良子さん（日本YMCA同盟常議員、横浜YMCA常議員）、横濱YMCA常議員が理事を退任し、山本俊正さん（日本YMCA同盟常議員、大阪YMCA、神戸YMCA常議員）が会計担当理事に選出されました。（東雲児童館 館長 岡田ナスカ

第1回 ジェンダー平等フォーラム

ジェンダー平等を推進する力に

9月13日〜15日、アジア・太平洋YMCA大会に先立ち「第1回ジェンダー平等フォーラム」が開催され、11の国と地域から73人（男性21人／女性52人）が参加しました。アジア太平洋地域における女性の現状や厳しい側面が紹介され、各国のジェンダー平等についての懸念を共有しつつ、学び、理解する場です。今後4年間の目標となる「ジェンダー正義に対する文書」の提言もなされ、その後の本大会で採択されました（以下記参照）。

「ジェンダー正義に対する文書」

① 差別のないジェンダー平等な環境づくりを目指す
② ジェンダーに対応したプログラムを実践します
③ 組織内におけるジェンダー平等の推進に取り組みます

④ スタッフのジェンダーに関する知識と理解を高めるよう取り組みます
⑤ ジェンダーの公正を促進する法律や政策を推進します
⑥ ジェンダー主流化を取り入れジェンダー平等を促進します
⑦ モニタリングと評価を行い、ジェンダー平等に向けたプログラムと戦略を継続的に改善することを目指します
⑧ ジェンダー平等を目指す志を同じくする団体にパートナーシップや協力を積極的に求めます
⑨ 各加盟団体が理事会承認したジェンダー・ジャスティス・ポリシーを持つことを求めます
⑩ 本方針の採択から3年以内に、すべての加盟団体が以下のようなジェンダー・ジャスティス・ポリシーを更新または作成することを期待します



※ Lesbian（レズビアン）、Gay（ゲイ）、Bisexual（バイセクシュアル）、Transgender（トランスジェンダー）、Queer（クエスティング）、Intersex（インターセックス）、Asexual（アセクシュアル）の頭文字。これらの頭文字に入っていない性的マイノリティもいることから、多くの場合最後に「+（プラス）」が付けられる。

東京ーNY フロストバレー便り

＊ニューヨーク近郊の日系人を対象にキャンプ等を行っている「東京ーフロストバレーYMCAパートナーシップ」。現地に向出中のスタッフからのお便りを紹介します。

アメリカの長い夏休み、サマーキャンプはもっともポピュラーな子どもたちの過ごし方だ。

この夏も、ニューヨーク近郊に在住の日本に縁のある子どもたち280人が、大自然の中で元気にたくましく仲間と過ごした。海外渡航制限が緩和され、久しぶりに日本へ一時帰国をする家族も多い中であつたが、キャンプはほぼ満員となり、日本から夏休みを利用して参加する子どもも数人いた。フロストバレーYMCA全体では、サマーキャンプに3,000人を超える子どもたちが参加し、コロナ禍前と変わらない水準に戻る事ができた。



1979年にスタートした東京パートナーシップのキャンプは、時代に合わせて運営方法も変化させてきた。近年は米国永住者の参加が増加傾向にあり、自宅で使用する言語についてのアンケートでは、参加者の約2人に1人が、自宅でも半分以上の時間を英語で会話すると回答があつた。ご両親のどちらかが日本語を母語としない方も多い。コロナ禍を経て、差別や偏見を見聞きする機会が増え、子どもたちの意識や知識も変わってきている。文化と文化の狭間で育つ子どもたちの苦悩を垣間見る場面も多くなった。

「仲間と出会い、安心できる環境の中でアイデンティティを築く」ーこれはいつの時代も変わらないテーマだ。この春にフロストバレーYMCAの新CEOに就任したリエル・ピアブームス（Riel Peerbooms）氏は、東京パートナーシップのキャンプを実際に見て、キャンパーと直接話し、このキャンプの大切さを深められたと話してくれた。リエル氏が「なぜキャンプに来るのか？」と質問すると、子どもたちは「ここはセカンドホームだから」「ここは自分らしくいられる場所だから」「リーダーがいるから」など、次々に手を挙げて想いを伝えた。

来年のサマーキャンプの受付は12月1日から始まる。自己を確立し国際人としての足場を築いていく、そんな貴重な機会を引き続き提供できるよう、しっかりと準備をしていきたい。

（東京ーフロストバレーYMCAパートナーシップ 星住秀一）

第5回 ユースアッセンブリー

連携とコミュニケーションの提供を

9月13日〜15日、アジア・太平洋YMCA大会に先立ち、18歳から30歳を対象としたユースアッセンブリーが開催されました。アジア・太平洋地域の国と地域から約130人が集まり、日本からは31人が参加。アイスブレイク、ダンスなどで徐々に仲を深めながら、最終日の韓国と日本との通常に中身の濃い時間を過ごしました。

グループタイムでは、各々がYMCAに関わった経緯やエピソード、思ったこと、思い、少などによる子どもたち



前列右から2人目が方波見 篤

それぞれの国について知り、互いを受け入れ尊重する機会をいただいたこと、海外でYMCAの一員としてアジア・太平洋地域の人々と共に同じ時間を過ごせたことを、非常に感謝しております。（にほんご学院 方波見 篤）